

別室登校一指導・援助の視点

理解する

緊急避難的な不登校児童の別室登校

↑ 教室での緊張感に耐えることができないが、別室なら登校できる場合

長期化した不登校児童の別室登校

↑ 不登校が長引いていたが、少し元気が出てきて別室に登校する場合

子どもにとって、別室は一つの居場所になり、学校を休んでいるという罪の意識を覚えないですむ場所にもなります。別室で規則正しい生活ができれば心身の健康にもつながります。保護者にとっても精神的な負担が軽くなります。

不登校のきっかけがあるのか、どう対応したのか、そのことからどのように欠席することになったのかをアセスメントする必要があります。

方針を立てる

緊急避難的な不登校児童の場合

きっかけになった出来事がごく最近に起こっている可能性が高いので、まずそのことを把握するとともに、児童生徒の内面を理解し解決を図る必要があります。不登校になってしまった本人への対応も大切ですが、きっかけになった問題の背景と本人の内面理解に関連した指導・援助がなされなければ、教室への復帰は難しくなります。

長期化した不登校児童の場合

きっかけになった出来事も特定しにくい場合があります。当時のクラスやかかわった者もばらばらになっていることが多く、本人や家庭の要因も重なっていることもあるので、不登校の背景がつかみにくいという側面があります。このような場合は過去よりも現在や未来に焦点をあてて、今できることから段階的に進めることが有効でしょう。

スムーズに移行するポイント

本人の心や体の状態がわかり、本人のペースに合わせていくこと

1時間の登校と約束したらそれを守る

「調子が良さそうだからもう少しがんばろう」と勝手にきめるのは失敗のもと

予定を変更するときは、必ず本人や保護者と相談して十分に理解を得ること

心の安定度、元気さ、次へ進む意欲があるかどうかを見立てること

教室への受け入れ態勢や学習の補充が可能かどうかの検討も必要

保護者が教室に戻ることを望み、本人の状態を理解し、過度な期待をかけずに、ゆっくりと見守ること

別室登校を維持するためには

別室登校の生活は、教室で体験できる交友関係や学習を同じようにはできないので、継続していくことが難しいという問題があります。自習をさせたまま何となく過ごさせているという状況に陥ってしまうこともあります。子どもによっては、次第に別室に登校する意義を見いだせず足が遠のいてしまうこともあります。子どもの状態像を把握しながら、しばらくは現状を維持することができるように心がけます。本人にとって登校が何らかの意味があるように援助していくことが大切になります。



一步を踏み出すために

別室登校をしている子どもの状態は様々です。やっとの思いで登校し、顔を見るのが精一杯という子どもから、毎日元気に登校して、そこに来てくれる友達と遊びながら、このままずっとここにいたいという子どももいます。また、学級集団の中で教室の仲間と一緒に活動を進めるには抵抗が大きくてうまくやっていくのが難しいだろうなと感じる子どももいます。教室に行く気持ちがあり、そこでやっていける元気があるのであれば様々な機会をとらえ、はたらきかけて教室復帰ができるよう援助と努力をするべきと考えます。

はたらきかける

別室登校に慣れてくると、授業のことや行事のことが気になり出す場合があるので、その都度、情報を伝えて参加を促すことも効果的です。最初は否定的でも、ある程度元気が出てくると、参加してみようかなという気持ちになるものです。行事の参加をとおしての成就感、達成感も必要です。

別室登校の意義は、教室には入れなくても、登校できる場所があれば家族以外の人ともかわりができ、場合によっては学習ができることです。

「成長を待つ場所」「心をいやす」場所として本人や家族の情緒の安定につながると考えられます。教室に戻すことを目的にするのではなく、「児童生徒が自信をもって学校生活を送ることができる」ことを最終的な目標にして対応をしていきたいものです。

対応について次の点を配慮しましょう

だれが、いつ、どこで、どのように対応するのか校内の指導・援助体制を検討し、指導・援助方針を立てます。

本人の状況に応じて登下校の時間、登校場所を検討しましょう。朝に登校することができない場合は夕方登校からスタートする方法もあります。

別室登校がスタートした時期は、児童生徒が心を開き人とのかわりが学べるよう1対1の活動を中心に「話を聞く」「一緒に遊ぶ」「好きなことや今できることをする」などの活動を通して対応します。

別室登校に慣れて元気が出てきたら、「好きな活動」を広げて学習に結びつけたり、時間割や計画表等を工夫したりして「学習の遅れへの不安」を解消しましょう。教室の仲間との交流を広げ、情報を伝えて少しずつ行事や授業への参加を促すことも効果的です。

保護者へは、家庭での状況を聞き学校での様子を伝えます。学校と保護者が連携を深めながら児童生徒の成長を支えていきます。

校内の委員会や研修の場で児童生徒の現状を伝え、全教職員で臨むための理解を図ります。



【参考文献】

小澤美代子『上手な登校刺激の与え方』ほんの森出版(2003)

長野郁也・花井正樹・生田純子『気になる子にこんなひとこえを』ほんの森出版(2000)

小林正幸『先生のための不登校の予防と再登校援助』ほんの森出版(2003)

岩手県立総合教育センター教育相談室『学校不適応児童生徒に対する指導・援助に関する研究』(2005)